
幻想の世界に落ちた呪い

通商路の要衝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の世界に落ちた呪い

【Nコード】

N6290T

【作者名】

通商路の要衝

【あらすじ】

モバゲーにて「幻想の世界に落ちた呪い」を執筆していましたが、エブリスタ移行に伴い、二次創作の強制排除の生贄に。――
一応完結していましたが、予定していた改定版をPCサイトの「人々が恋した幻想郷」に投稿開始。――
しかし、携帯で気軽に読みたいとの声があり、この度「小説家になろう」にも投稿させていただきました。――

作風に関しては、史実小説とまではいきませんが非常に硬い。硬派

系です。――

設定なども、エブリで執筆中のオリジナル小説（ハルマゲドン）I
n v i t a t i o n t o r u i n ）が入り組んでいるので難
解なところもあると思います。――

まあ、アマチュアが書くライトノベル感覚で……――

ちなみに、東方二次としては邪道であると先に断っておきます。――
いや、ある意味幻想郷の理論的には良いんだけど――

あらすじ――

・白髪ミニマムロリっ子ペろペろ（^^）

プロローグ1（前書き）

人間が憎いか。と問えば、人外はこう答える。

「憎い、憎い。どんな悪事も都合の良いように解釈し、まるで自分達は何も悪くないという態度が、許容しがたい殺意を沸きあがらせる」

矛盾を多く抱える人間は、存在するだけで害悪。

それを目にして殺意を抱かない者はいない。

もしもいるとすれば、それは人間のように穢れきった心を持つものだろう、と。

人外が憎いか。と問えば、人間はこう答える。

「憎い、憎い。あの醜悪な化物どもは、なんの悪びれもなく最愛の人達を貪り食い干切る悪魔だ。今すぐにでもこの手でやつらをくびり殺したい」

その恵まれた強靱な肉体で、我が物顔でありとあらゆるものを奪う悪魔。

惨憺たる虐殺を見て、我々は手も足もでない。

それを良い気にやつらは次々と理不尽な殺戮を繰り返す。

同胞の無残な死を見て、憎悪を抱かない者はいない。

もしもいるとすれば、それはやつらのように穢れきった心を持つものだろう、と。

プロローグ1

「？」

「……殿？」

「カタストロフ殿！！」

もうすぐ雌雄を決する。そんな大切な時に、俺は考えごとをしていた。

……らしくない。

”ひたすらに前へ進め。後ろなどない。前だけを見る”

その言葉を胸に、私はここまでやってきた。

なのに、最後の最後に後ろを振り返ってしまった。今さら彼を想ったところで、それは何にもならない。

ため息に残心を載せ、かぶりを振った。

「すまない。こんな時に考え事をするとは……」

いったい今のはなんだっただろう？ と、俺は思考を巡らす。戦闘以外に余分な思考はせず、ただ、人間を殺すことにのみ専念する。

何十、何百年と、そうして生きてきた。今さら迷いが生じるはずがない。

だからこそ、周囲の感覚が消失する 『上の空』を体験したことが無かった。

微かな不安を感じながら、俺に声をかけた男を見上げる。

「心配しましたよ。いくら声を掛けても反応がないものですから」

今回の戦争で、右翼総隊長を務める、ゲオルク・ギーク・ニルダム。

眉間に皺を寄せて心配そうに見つめている双眸は、人外の中でも特殊な金目。

人外の中で、最も『始祖』に近い血統の者である。そして、年齢1200年もの長寿者でもある。

背には黒と白の入り混じった羽毛のある巨大な翼を携え、身の丈は3メートルもあるうか。

強大で屈強な肉体は確かな人外……鬼種であるが、ニルダムは他と少しばかり異なった容姿をしていた。

肉体そのものが頑丈なのは『鬼種』と呼ばれる一般的な人外だが、彼らは翼を持たない。

翼を持つ人外は、また別な分類にある。

そつ。

『龍種』という翼を持つ人外の血も引いているのだ。

左翼の総隊長を務める者も同じく鬼種と龍種の混血。

龍種の始祖はとうの昔に息絶えた聞くが、その子孫は残っている。個体差はあるが、翼や鋭い鉤爪、牙、強靱な尻尾を持つ者がそれである。

鬼種は単に筋力が逸脱していて肉体が頑丈というものだが、龍種は機動力にも優れ、その分、鬼種より筋力が劣る。

そのため、今回のような戦争では機動力に優れた彼らが左右の部隊の指揮に適している。

「すまなかった。して、こちらには現在どれくらいの人外が集まっている？」

俺の問いに、ニルダムは難しそうに首を捻る。

人数くらい自分で確認したいところだが、生憎と、俺は”この時代に適合しない体格のため”周りが全く見えないのだ。

皆が皆、2メートルを優に超える巨躯の持ち主。

この中で俺だけが1メートル弱。所謂、小人。それほどまでに、この身は幼く、小さい。

俺は他人の目など気に留めない気質だが、無理がある。

「おおよそ千……ですね」

周囲の者達に嫉妬していると、ニルダムが人数を数え終えたようだった。

この広大な荒れ地にたったの千。

もつと多くの人外が集ると踏んでいたが、人外の境遇は他でもない、俺が理解している。

だが、問題は無い。そう確信している。

人外は人間と違い、個々の強さは人が束になってさえ対抗できないほど。

龍種と鬼種は人外として区別され、人間達は人種として在る。

龍種と鬼種は戦いようでは互角だが、人種など我らにとって取るに足らない下等な存在。

それほどまでに強力な人外がこれだけ集まっている。勝利を確信せずになんとするか。

千人で人間の軍勢1千万を相手にしても、赤子を捻るようなものなのだ。

……問題は。

と、俺は最悪の事態を考えていた。

それは、この戦いが”人外対人間”であることだった。予想では、敵勢力は　この大陸に蔓延る人間の全て。

しかしそれも、国や言葉の違いから統率は取れないし、ましてや膨大な軍勢へすぐに指令を伝えることも不可能。

俺達人外が突撃すればあつという間に陣形は崩れる。

だが、不安要素がある

圧倒的な物量差による、桁違いの疲労だ。

肉体の疲労はもちろんだが、精神面での疲労も戦争では注意しなければならぬ。

7

「人間は見えたか？」

「いえ、まだです」

間髪いれず返答が返ってくる。

つい先日、人間に対して宣戦布告をしたばかりだ。

人外の存続を懸け、悪の根元である人間を滅ぼす、と宣言した。人外と人間は相容れず、双方とも、互いを敵と見なしている。和解など以ての外。

これは、どちらか一方の存命を賭けた、最初で最後の戦争である。そこに、人間が約束の時間を守らないなどと考えられないが

「いえ たった今、人間を確認しました。これは……」

息を呑む声に何かを感じ取り、周囲の者達を押し退け、その光景を見た。

遙か遠方が土煙で全く見えなくなっている。
眼を凝らし、地と空の境界線を見る。

そこにいるのは……人、ヒト。ヒトヒトヒトヒト。
数えるのがばかばかしくなる数の人間だった。
目が悪いからか。もはや、それは灰色の海に見える。

顔まで覆う全身鎧に身を包んだ、異常な数の人間。
それは数万、数十万どころの数ではない。

後に延々と、鎧を纏う者、甲骨を着け馬に乗る者、戦車を引く馬と共に歩く者など、実に様々。

手に持つ長槍はフランクスの陣形に用いられるのだろう。

そのフランクスも改良が施されている。二列一組。

前列は盾に槍を固定し”そのまま滑るように”移動している。

後列は槍と筒の様な物を持ち、肩に腕くらいの管をいくつも担いでいる。

しかし、人間が持っている武器は異様な形をしている。
重量を減らすために彫られた樋と思わしき物。

そこに何か、液体のような物が流れているように見える。

あの樋は……柄頭の黒い石から続いているようだ。

槍の他にも、実に様々な武器がある。

一番厄介そうなのは やはり、話に聞く戦車だろう。

人外とはいえ、あんな物に轢かれては終わりだ。戦車自体の砲弾も危惧しなければならぬ。

力の有る者で先に戦車を叩き潰し、ファランクスを崩すのが最善だろう。

「伝える。力を有する者で手早く戦車を叩き潰し、ファランクスを崩せと。ああ、そつだ。人間の持つ武器には気を付けろ、とも伝えてくれ」

「了解致しました。皆に、そう伝えてきます」

指示を伝えに行つたのを確認し、人間達が畏怖の念を込めて『ダークフライト』と呼ぶ”剣”で身体を包む。

顔以外を覆い、手先に剣のイメージを編む。

ダークフライト本来の形である。

人間どもの陣形は大規模なファランクスによる包囲陣。地形はファランクスに適した広大な荒地。

そして、私達の背後には海。

例え船が来ようと人外ならば海上で潰せるからこそその考えだが

……それは向こうにお見通しのようにだ。

大きな軍隊で敵の先入観を欺き、その隙を別部隊が突いて総崩れにするという、一見地味だが絶大な破壊力を持つ戦術が一般的なはずである。

それが通用しないと判断する敵の司令官は人外のことをよく理解している。

勝率が少しばかり下がったが、逃げるつもりなど毛頭ない。

俺は逃げるつもりなどないが、戦意を失った仲間はどうだろうか。飛べる人外はともかく、飛べない人外は成す術なし。

……この数に、完全に戦意を失う前に決着を着けるしかないな。

戦車を潰しさえすれば人間側の戦力は削ぎ落とされる。

その後ファランクスを守りを砕き、正面以外からの攻撃には脆いという弱点を突く。

そこから陣形を突き崩して乱戦に持ち込むのが最善だろう。

問題は、ファランクスの後ろにどんな陣形が敷かれているか、である。

実際に目の当たりにするまでは判断は下せない。

……仕方ない。全力で当たるまでだな。

「俺が先行する。本隊及び右翼左翼もそれに続け。戦車の破壊を最優先とし、その後ファランクスの喉笛に噛み付いてやれ」

そうすれば勝ったも同然だと声を上げる。

”勝つ”という言葉を使ったが、ほとんどの人外は戦意を失っていた。

さすがに、これほどの数には戦う前から士気が落ちてしまうか。

仲間の不安を他所に、剣を高く掲げた。それに呼応するように、敵の陣の中心が割れる。

現れたのは屈強そうな馬に乗った、いかにも隊長といったふうの騎士。

白銀の鎧に身を包み、槍 巨大なランスを手に持っている。

ランスを俺と同じように高く掲げたのを確認し、息を大きく吸う。

おそらく、最初で最後であろう戦争の開幕だった。

プロローグ1（後書き）

はい。

まだまだプロローグ続きます。

この作品終了時には2MB近くあったので、非常にながったらしいです。

日常とか書きたいのでさらにry

文章に関しては、うん、まあ、見た目通り無骨。

柔らかい・読みやすい文章構成にできないんですすみません僕の性質なんです（ビクンビクン

もちろん携帯で見れますが、この構成なので（ビクンビクン

投稿って感想怖いですよね……

というわけでビクンビクンしております（???）

プロローグ2（前書き）

ふははははは！

まだ書き貯めがあるのでござるっ！

まだお試しなので、使い勝手が分からぬ次第。

はい。まだまだ続きます、プロローグ章でございます。
あらずし

- ・白髪ミニナムロリっ子ペろペろ（^^）
- ・むさくるしいおっさん燃え燃え（^^）
- ・おにゃのこまだぁ（^^）？

プロローグ2

剣を片手に、荒れ地を駆け抜ける。

もはや、走る動作の範疇ではない。地面を滑降するような足運び。遠くに聞こえていた人間共の、大地を揺さぶるような雄叫びも間近に聞こえる。

数キロメートルの間合いは一息でゼロになる。

交戦準備が完了していない、軍隊の最前列と衝突。

フアランクスの中から槍が投擲されるよりも速く剣を横薙ぎに振るう。

耳障りな甲高い金属音を鳴らし、一番前にいた重装歩兵の盾もろとも、鎧を引き裂く。

屈強な鎧も、この呪いの剣の前では果物を切るよりも容易く断つことができる。

そして、胴を切断された複数の人間は痛みと恐怖の入り混じった、悲痛な叫び声を上げて絶命していく。

絶命した人間の体は急速に腐敗し、どろどろとした液体となり地に落ちる。

肉が腐る臭いと、鉄の臭いが入り混じった、悪臭が濃霧のようにたちこめた。

それを後ろで見ていた幾十、幾百もの人間が呻き声を上げた。

屈強な鎧でも、歴戦の戦士でも、信じられない程の戦力でも、勝ち目がない。

そんな、恐怖の瞳が全身に浴びせられる。

人間から向けられる恐怖　なんと心地良いことかっ！

「う、うおおおおおおッ　　！」

俺の右側で立ちすくんでいた人間が先陣を切って、謎の石がはめ込まれたランスを突き出した。

左下段から弧を描くように、つま先から脚の屈伸、腰の回転、背筋、腕の力を余すことなく伝達し、強烈な突き上げが直撃する。

ガツン、と鋭い音を立て、呪いによって編まれた鎧にランスが衝突する。

激しい衝撃が横腹を襲う。

……なに！？

衝撃に対する驚愕ではなかった。

ランスが鎧に衝突したのが、驚愕だった。

「ダークフライトが、人間の纏う盾と鎧を”融かす”ように切り裂いたように

実体化した呪いは、あらゆるものを憎悪する灼熱の炎。

火山の溶岩などという、生易しいものではない。

焦がす暇もなく対象を溶かし、そこから呪いが対象の全体に侵食する。

呪いに蝕まれたものは、生物ならば裂かれたところから寸断され、傷口から感染する呪いで腐敗し果てる。

生物でないならば、裂かれた場所だけが溶けるか、風化するように消滅する。

剣と同様に、この鎧も全く同じもの。

ただのランスが鎧に衝突したならば、衝突した先から呪いに侵され、消滅するはずなのだ。

驚愕で凍結した思考を振り払い、正常な思考を展開する。

いくら力が人外のものと言えど、体重は見た目相応。空中に投げ飛ばされた俺を見て、つい先ほどまで絶望の目をしていた人間どもは、希望を見出したようだった。

この武器なら勝てるぞ。

勝利を確信した咆哮が、雷のように大気を振るわせる。ギリ、と歯を食いしばった。

……人間ごときが、人間ごときが

虚空を舞う白いもや　大勢の人間が踏み荒らして舞い上がった土の感触を確かめる。

俺が地面に叩きつけられるのを、今か今かと待つ人間ども目掛け……

砂の存在に干渉し、イメージというエラーを流しこむ。
強制的に砂という存在が紅玉髓カーネリアンという存在に書き換えられ、質量も全くの別物となって生み出される。

普通ならば穴だらけである空想　イメージも、異常発達した脳を持つ私ならではの特異さで、穴がないイメージが確立される。

完全な楕円の球体をした紅玉髓は、ただの紅玉髓ではない。
内部には、どんな技術をもっても不可能であろう、文字が刻まれていた。

その文字は、自然から生み出された文字であり、それが自然の歴史を身に刻んだ鉱物に書かれた時にこそ、自然と一体化することができる。

空中で体を擦じり、腕を振るう。

紅玉髓が真っ直ぐに地面へと落下する。

人間どもがそれを気にした様子はない。

しかし、その瞬間には、なにも考えることなく、死への恐怖を抱くこともなく、私が落下するのを歓喜したまま人間どもは木端微塵に散っていた。

脳が潰れてしまいそんな爆音が世界を飲み込む。

続いて、肉を一瞬にして炭に変えてしまうような灼熱の炎が、凄まじい圧力とともに襲いかかる。

身動きの取れない空中で火山の噴火を真正面から浴びた思いで、さらには、上下左右が把握できない状態での落下。

当初舞っていた空中から遙か遠くに、べしやりと地面に叩きつけられる。

そこにも、多数の人間どもの気配が感じ取られた。

髪が焼け焦げ、鎧で覆われていない顔面は目も当てられないほどの火傷を負っているだろう。

けれど、痛みは感じられない。

痛い、という感覚は遮断されたように認識できない。

触れる、冷たい、熱い。それらの感覚は分かるが、痛覚のみは麻痺。

生まれて初めて自我を持った時に、今では記憶が摩耗しているが、地獄のような体験をして痛覚が麻痺してしまったのだろう。

そんな、戦闘者としてはこの上ない最高の境遇のおかげで

「死ね！ この化物が！」

俺の頭上でありつただけの憎悪をこめて吠えたて、人間どもが手にする武器で体を打つてくる痛みは、全く感じずに済む。

それどころか、さきほどの 『彼』 から教わった秘術の一つ。

自然文字、自然物の使用、自然と一体の意思。

この3点から自然と意思疎通をし、意図的に自然現象を発現する業。

灼熱の炎に似た紅玉髓を媒介に『火山の噴火』を模した爆発のダメージも感じることはない。

人間どもの攻撃を無視して起き上がる。

それだけで、いきがっていた人間どもが、ひっと恐怖の声を上げてあとじさった。

焼け焦げた顔面の皮膚、唇、眼球、髪は、すでに再生し終わっている。

人間に災厄の使徒カラストロフと畏怖されている俺は、無傷のまま、一步踏み出す。

見た目は誰よりも幼く、小さい、たかが子供。

けれど、中身は 痛みも、死も、恐怖もない、人の心も理解できない、人という存在を真っ向から否定する生き物。

故に。 正真正銘の怪物。 災厄の使徒カラストロフの異名を得た。

人間どもは、ついさっきまでびくりとも動かなかった俺を虫けらのように扱っていたが、今やこれだ。

俺の倍もある身長に、岩肌のように聳える巨躯の持ち主だということに、がたがたと恐怖に体を震わせていた。

中には、目を合わせただけで地面に転げる者までいた。

滑稽。実に滑稽。

その無様な姿が、心地良い。

命乞いをする人間どもの姿が、言いようのない快感を与える。

そして、それを切り伏せる時の絶望を張り付けた醜悪な顔が、俺にさらなる快樂を与えてくれる。

プロローグ2（後書き）

はい。プロ2です。

こう略すと気分いいですね／＼

まあ、スラッシュ3連で「恥ずかしい」という表現は解せぬ。

この小説然り、って思考どうにかしたいー昨年この頃。

カラストロフ。改訂前から見てくださっている方は違和感感じますよねー。

精密殺人兵器ってイメージなんだけど、快樂殺人鬼になっちゃってる。

いや、いいんだけど）

できるだけイメージしやすいうふうに書きたいものの、プロローグだけはどうしても堅苦しくなってしまう。

語り的な形なので、なおさら（???）

ちよっとした合間に読むような作風ではないので、寝る前のぐでつとした状態での読書？愛読？を才又又メしますっ！

ビクンビクン

プロローグ3 (前書き)

ふははははは！

まだまだ書き貯めがあるのでござるっ！

まだまだお試しなので、使い勝手が分からぬ次第だい。

はい。まだまだ続きます、プロローグ章でございます。
あらしす

- ・白髪ミニナムロリっ子ペろペろ (^ ^)
- ・むさくるしいおっさん燃え燃え (^ ^)
- ・おにゃのこまだぁ (^ ^)？
- ・(・)。(・)プロローグなげえ

プロローグ3

小高い丘から白銀の鎧を纏った、やや老いを感じ取れる風貌の大男が戦場を眺めていた。

立ち込める土煙で、広大な戦場全体を見渡すのは困難だ。しかし、もはや戦場全体を見渡す必要などなかった。

人外に対して有効な、絶え間なく絶大な火力を屠る攻撃を可能とした砲弾を搭載した戦車。

人が使える、強力な遠距離攻撃を可能とする砲銃。

一部、信じられないような異能を秘める人外に対して有効な、『概念』を込めた石を取り付けた数々の兵器。

戦況は一瞬にして人外討伐軍に傾いていたからだった。

千あまりの、強力な人外のみが集う敵軍も、新兵器や圧倒的な戦力差の前では手も足も出なかった。

だが、その戦況を見て喜び、踊っている人間のように、私も同様に喜ぶ気にはなれなかった。

彼ら人外は 私と同胞でもある。

その彼らが、今まで何百年という歴史の間、どれだけ人間に迫害されて苦しんできたか。

その上、我々は人外を根絶やしにしようと、大陸中の国から鍛え抜かれた軍を集めて大虐殺を行っている。

この戦争の裏では、カタストロフの手で助けられた人外が密かに暮らす秘境への進軍も始まっている。

理不尽な待遇の上に、理不尽な虐殺。鎧が軋みを上げる。

「いやはや、さすがですな、エンディバラ殿」

長い髭を撫でながら、隣に歩み出て来た老人 私に隣接する大国の王、シユメトフ・カーランである。

今まで人外に壊滅的な打撃を受け、最愛の孫や家族が住む都をカタストロフの手で壊滅させられたという。

カタストロフや、その仲間には深い憎悪を抱く人物の代表的な例だ。

眼下に広がっている何億もの兵士達も、カタストロフ達の悪行に憎悪している者達。

「エンディバラ殿が発案した新兵器の数々。盾と槍を一体化し、車輪を設けることで機動力を削ぐことなく圧倒的な制圧力を発揮する
武器……」

昔からお互いの交易の関係上、仲が良い老人は口々に私を褒めた

たえる。

たしかに、私が発案した兵器のおかげで予想以上の制圧力を発揮し、敵人外はほぼ全滅と言っている。

……だが、これは。

胸が苦しい。

人間と同じように喜怒哀楽も分かる者達を、このように虐殺しなくてはならないとは。

それこそ、人としてどうか問われるものだ。

隣に立っている老人は、くつくつと喜びの笑いを上げている。

「ひひひ、見よ。あれだけワシらにたて突いた化物どもも、成す術なく死んでいくわい」

ああ、よきかな、よきかな。と老人は喜びに入り浸っていた。

ギシリと鎧が鳴る。

「彼らにも、彼らの正義がある。彼らからして見れば、我々は悪以外の何者でもない」

身を焦がすような怒りに、体が震える。

体の震えは鎧に伝達し、かたかたと金属音を立てていた。

「全軍を引かせる」

怒りを滲ませた声色に、老人はびくりと体を震わせた。

虚勢を貼って、なぜ軍を引かせると食ってかかるが、なんの威圧感も感じられない。

そして、それ以上食ってかかる気配もなく、呆気なく押し黙ってしまった。

我が一族は鬼種の祖の血統を維持し続け、この広大な大陸の3分の1を収める大国を治める王族である。

エンディバラ・ドウクス。私で、その3代目の王だった。

私の父、祖父と、二代に渡って血も涙もない、厳格な統治体制が敷かれていたが、私の代では全く異なるものとなっていた。

王らしくない王。それが私の傷名と呼ばれるものである。

あらゆる権力と威厳を持って統治するのが絶対的な存在である王というもの。

しかし、私は、一人の民として、民達と同じような生活をしていった。

豪華な食事をするのであれば、林檎酒に大麦パン一つという時もある。

王家に仕えて来た召使たちとも、対等に話せば、対等に振舞うこともある。

王としての権力も威厳もない。その統治に臣下達は不満を口にしていたが、それもしばらくのこと。

王に即位してから750年。

一度も内乱は起こっていない。

多少の犯罪が起こる程度の、前代未聞の平和が続いていた。

各地では『人を喰らう化物』という人外の噂で暴動が起こっていたにも関わらず、人外が王である私の国は微動だにしなかったのだ。

私に対する人望でそれほどに強固な国家が出来上がっていた。
民が国家を作り、王である私は、民の補助のような立ち位置だっ
た。

王らしくない王。まさにその通り。

私自身、王という身分はこの上なく嫌いだった。

「なぜ、同じ生き物なのに身分の違いがある」
それが私の考えだからだ。

比較的温厚、困ったことがあれば助けてくれる心優しい王様。
そんな評判ばかりだが、非人道的なことがあれば心は鬼となる。
それが、私だった。

だからだろう。

同じ生き物が、こうして虫けら同然に扱われ、それを喜んで見て、
嘲笑う者がいると憤怒で体が燃える。

再度、眼下に広がる戦場を見渡す。

もはや、戦闘が行われている地点は一ヶ所のみ。

たった一人の人外を除いて、敵軍は全滅していた。

プロローグ3(後書き)

はい。プロ3です。
こう略すと)ry

どンドン奇怪な単語が出てきていますね。
基本的に、ばんばん受け流していつて大丈夫です。
プロローグは流して読んで、後々理解できて「あらそうなの(^
^)」ってなればいいだけの存在なんです！
と、僕は思っています。

プロローグにこう繋がってたのかウオオオオオオ！って作品あるんですけど、そんな神った業ありません。はい。

しかし、どうも説明口調な文章になってしまふ。
相変わらずの性質だが、急に流れぶったぎれてる感が否めない。
いや、確実にぶったぎれてるんだらうけど(????)

(????) この顔文字って、もしかや携帯だと文字化けするんじ)

ビクンビクン

ブログ4 (前書き)

ふはry

まだry

まだまだお試しry

はい。まだまだ続きry

あらし

・ (^ ^)

・ 筋肉おっさん燃え燃え (^ ^)

・ 俺っ子っておにゃのこだったんだ (^ ^)

・ (´) 。 o (ブログ終わり見えてきた

プロローグ 4

そのたった一人の人外は

本来、神聖な雰囲気漂う真白な体をしている。

そしてあまりにも小さく、幼い。

この世の者とは思えないほど愛らしく、一部の隙もない美貌をもった少女。

それが普通の姿を見た時の、彼女　カタストロフと呼ばれる、最悪の怪物のイメージだった。

けれど、今は彼女の本心が余すことなくさらけ出されている。

この世の闇という闇を集め、悪しき心を底に収束すればそうなるかもしれない、といった暗黒の姿をしている。

真白ゆえに、真黒染まったとばかりに。

カタストロフ。

『災厄の使徒カタストロフ』が定着した通り名であり、彼女は他にも殲滅神、根源の悪、と数多の名を持っている。

泣く子も黙る、最強最悪の怪物として。

半面、同族である人外には救いの神として崇められている。

全知全能の神、救世主など、英雄的存在である。

また、戦いだけでなく、物を作る技術なども優れていると聞く。

この世に『完璧』など存在しないと思っていたが、彼女は、正真正銘『完璧な存在』だった。

いかに強力な人外と云えど、夥しい人間を前にしては紙くずも同然。

もはや、奴隷以下の以下。

これ以上の底辺はないとまで貶められた人外を、たった一人で絶望の淵から引き上げたのだから。

そんなたつた一人の人外を相手に、何億もの軍勢はたちどころに沈んで行く。

いや、吞まれて逝く。

地獄絵図だった。

彼女に刃が達したのは最初の一時のみ。

あとは、揉まれるがままに我々の軍勢は押されていた。

この世のものとは思えない圧倒的な力に、あらゆるものを殺し尽くす想いに、戦慄する。

いったい何があれば、あそこまで強く、折れることのない不屈の魂を宿すのだろう、と。

身震いする。

彼女に、私は立ち向かわなければならぬのだ。

その恐怖は果てしなく深く、底が見えない。

脇に立つ老人の存在を忘れたように、ただひたすらに、地獄のただ中を舞う少女を見続ける。

少女の持つ、これまた、少女の体を覆う暗黒と同様の剣は、いつの間にか両身両刃という見たことも聞いたこともない奇形の剣となっていた。

その剣は遙か昔から知られる魔剣　ダインズレイヴとどこことなく似た雰囲気を持っていた。

私の遙か遠い祖先である、鬼ノ祖ウロボロスが、この世の全ての存在を羨んで未知の鉱物を鍛えたという剣。

そこに人間的な欲の表れである装飾はない。

抜けば、どんな鋼鉄すらも抵抗なく切り裂く、呪われた刃。

無骨な柄や鍔、刀身には、『彼』の嫉妬　憎悪、呪いとも言える呪詛が染み込んだ黒塗りの暗黒剣。

それが、ダーインスレイヴである。

禍々しい気配は、その剣に近付くだけで、霊的な気配をなにも感じ取れない常人でさえ冷や汗を流すほど。

眼下の戦場には、その濃密な憎悪の気配が充満していた。

人智を超える呪いを身に懐く剣が、人智を超えた憎悪に突き動かされる少女の手によって本来の力を発揮している。

最高の相棒である少女に協力してやまない魔剣は、切り裂いた人間の生命力をたちどころに吸い尽くし、傷口からも生命力を絶えず奪い続ける。

ひとたび切りつけられればそれまで。

到底一人の者の憎悪とは思えない邪悪な念が、この世のどんなに強い毒素をも超える勢いで死に至らしめるからだ。

あれに対抗しうる手段は、私しか持ちえていない。

五百年以上も永く続く人間と人外の争いの最中に現れた、怪物力タストロフに対抗する手段を講じ得ないわけがない。

カタストロフがこの世の邪悪の塊だと謂うのならば。

「この世の神聖な塊をぶつければよい」

怪物を討伐し、恒久的に続く平和を願って、私の父は死んだ。

太陽よりも眩い光を放つ白銀に輝く鎧。

そして、どんな悪魔をも圧倒する巨大で威厳ある槍。

抜き放てば世界を焼き焦がさんばかりの希望の光を放つ剣。

どんな攻撃を受けても傷一つ付かない城壁のような盾。

鎧。槍。剣。盾。

力の象徴たる4種の聖なる武具を作るための炉に、父はその言葉

と共に身を投げた。

邪悪な念に対抗するには、聖なる念をもって挑まなければならない。
い。

そのために、自らの聖なる意思を武器に宿わせようとしたのだ。

私の国の中で突如として現れる、発狂した人外討伐に、私は幾度と赴いた。

その時に、それらの武器を纏って戦いを挑む。

強力な力を発する人外の異能は鎧と盾の前に蒸散し、槍の前には人外の圧倒的な回復力も無駄な足掻きだった。

数えきれないほどの人外を葬った槍は、魔槍とも呼べる代物だが、人々にとっては最強の聖なる槍である。

人々の想いによって、それらの武器はさらなる力を秘め、より一層強大な物となる。

人々が畏怖の念をもって少女をカタストロフと呼び、その剣をダークフライトと名付けた。

人々が尊敬の念をもって私を聖騎士と呼び、我が父に感謝を込め、これらを破魔のアイギスと名付けた。

もはや、運命としか言いようはない。

初めて彼女とすれ違った時も、こうなる運命だと思っていたのだ。

あの　深い悲しみで己を見失い、それにさえ気付けない孤独の少女の瞳は、今も焼き付いて離れない。

彼女とは大陸の端の都で出会ったのだが、その数ヶ月後には、その都はカタストロフの手によって壊滅させられた。

もちろん、その時いた人間に、ただの一人として生き残りはいない。
い。

私自身、彼女を止めないわけにはいかないと思っていた。だが、心の奥底では彼女を殺すわけにはいかないと思っている。噂によれば、彼女最愛の家族が、今まで世話し続けていた都の者達の手で殺されたというのだ。

『人を喰らう』化物という噂が立ち、彼女とその最愛の人が住む都でも騒ぎが起こる。

人間としては、30年生きれば長寿という中で、彼女らは百年以上も生きていた。

彼女らあってこそその都といえども、民は化物が握っている都に居て生きた心地がしなかったのだろう。

彼女らは、今まで世話してやった民に罵声を浴びせられ、自ら身を引いた。

だが最終的には、その民らに最愛の人ともども、彼女についていた護衛兵 家族を皆殺しにされた。

話の細部は彼女本人しか知りえない。

これは、ただ語り継がれた噂話にすぎない。

けれど、話によればその家族とやらは、人間に抵抗した痕跡がないらしい。

どこまでも、民を想っていた彼ら。

しかして彼女は、今までの恩義を忘れて最愛の家族を虐殺した人間を呪わずにはいらなかった。

それが、災厄の使徒カラストロフが生まれた物語である。

プロローグ4（後書き）

はい。プロ4です。

こう（ry

若干、キャラ設定などが見えてきましたね。

どどん厨ニマツハです。ですが、俺TUEEEEE SAIKY
O! っつのは嫌いなので心配御無用！かな（、、（

加筆修正加えての投稿なう。

いつ幻想入りすんだよks! と言いたい気持ちがそろそろ……
モバゲだと80Pくらいプロローグ続いた気がするwww

31から神奈川県だ（ビクンビクン

プログラグ5(前書き)

r y

r y

r y

r y

あら

・
(^)

・
筋肉(^ ^)

・
善人(^ ^)

・
(') 。 o (プログラグ終わり見えてきたよ！

プロローグ5

彼女は人間の心を忘れている。

愚かでしかないヒトと同じ、心を捨てたモノへと成り果てている。胸が締め付けられる。

おそらく、純粹無垢だった彼女は、目の当たりにしたヒトの理不尽さと醜悪さに絶望したろう。

こんな”モノ”のために、私達は誠心誠意つき込んだというのか。

その恩を仇にして返す穢い心も、見るに堪えないほど汚らわしいと。

彼女の残虐性の秘密は、そこにあっただろう。

だから、人間を殺すことに躊躇わない。

むしろ、死んだ家族のためであり、清く正しい世界を作る一歩だと胸を張って、喜んで切り刻むだろう。

自分と似た境遇の人外達も、それにつき従う。

自分達の明るい未来を夢見て。

人間も人外も、立場が違っただけでほとんど同じ想いでこの戦争に挑んでいる。

いや、もしかしたら、人間の方が遥かに悪いのかもしれない。

そんなことを考えるのも、王らしくない王と呼ばれる私ゆえか。

きっと、憎むだけの敵へそんな感情を抱いているのは、この戦場の中、私一人だけだろう。

……彼女を殺すことは、できない。

その想いは、宣戦布告を受けた時も揺らぐことがなかった。

彼女を殺すことなく生き長らえさせ、悲劇に塗り潰された、本当

の心を取り戻してやりたい。

それが、私の願いだ。

一人の娘を持つていた私には、彼女の姿は目も当てられないほど痛々しい。

娘も、家族を奪われればこのように悪魔ともなりえるのだろうか、と。

彼女に、私は娘の姿を映していた。

より、彼女を殺したくなくなり、救いたいと思うのだ。

それが実現しえない空想でしかないことは、私自身、この上なく理解していた。

だが

その空想が、実現できる可能性を帯びたのだ。

首を巡らせ、背後に佇む青年に頷いてみせる。

彼こそが、不可能を可能とする秘法を持ち、私にその作戦を提案した救世主だった。

彼も、私と同じ人外だった。

彼も、私と同様の考えの持ち主だった。

カタストロフは、彼女は死んではならない存在だと。

だが、この戦争では彼女を消滅させなければならぬ。

それを前提とし彼女を救う方法など、どう考えてもありません。

しかし、彼はそれを実現させてしまう驚愕の秘術を体得していたのだ。

大陸中から屈強な兵士を集めた陰で、精神的な力　　霊的な力を秘める者達を私と彼で掻き集めた。

名目では、魔術によってカタストロフを封じ込めるといった風に。

実際には彼が『起源と終焉』と呼ぶ、謎めいた空間を開くのだ
た。

あらゆる歴史。未来と過去。様々な筋道を通った世界のすべてが
一ヶ所に内包された空間。

そこに一時的に繋げる道を作り、カタストロフを生かしたまま、
この世から消し去ってしまおうというわけだ。

その後、どうなるかは想定しえない。

そんな無責任なことをできるわけがない、と食ってかかる私を見
透かしたように青年は言った。

「それを可能とするには、儀式の中央に彼女を括りつけなけ
ればならない。それを可能とする方法はない」

それだけが、この作戦の致命的な欠陥です、と彼は陰険な笑みを
携えて言う。

私は、突き動かされる思いでその役を買って出た。

彼女の戦闘能力は周知のこと。

人外としての力よりも、彼女は戦闘技術の方が圧倒的に優れてい
たのだ。

肉体的にも、技術的にも劣る人間が彼女に拮抗しうることはない。

それは、この軍勢をもってしても進撃を止めない彼女を見れば分
かることだ。

私しかいなかったのだ。

まさか、この戦場にいる者に対して、

「カタストロフを封じ込めるから、お前達はその生贄となれ」
などと言えるわけがない。

今まで、散々に自分達を苦しめたカタストロフを抑えつける役、
それは英雄として讃えられるだろう。

中には、進んでその役を買う者もいるかもしれないが、これ以上の犠牲は出したくなかった。

私だけが犠牲となる。

また、なによりも 彼女と共に、どことも知れぬ場所に飛ばされれば、彼女の行く末を見守れる。

願ったり叶ったりではないか。

希望と恐怖、不安、これからの死闘に対する動物的興奮がない交ぜになっていた。

抑えられない気持ちのまま、鎧を大きく鳴らし、私は出撃の準備をするために武器庫へ入って行った。

プロローグ5（後書き）

はい。プロ5です。

（ry）

時代背景というか、背景でできました。

どんな歴史的背景と根本的な設定があるのかうっすらと理解していただくのが目的です。

分かりやすくしようと思っても、気付けば文字だらけ。

（ノ、（。。。。

今日神奈川県に移動だ（ビクビク

プロローグ6(前書き)

ry

あらずじ

・硬い戦闘……

・血が(^ ^)

・(') 。 o ()プロローグ次で終わるぞ！

プロローグ 6

ランスほどの長身に、岩肌と見まごう厚い胸板。

巨木を思わせる太い腕。

まるで地面に根を張ったような脚。

なにかのために用意されたとしか思えない、戦闘者として恵まれた肉体。

いつ訪れると知れないその時まで、武芸に努め、体を鍛えない日はなかった。

その時が、とうとう訪れたのだ。

私の体。身に纏う鎧。携えた槍に盾。盾に仕込んだ剣。

それらに耐えうる屈強な馬に跨り、気合の声とともに戦場を駆け抜ける。

兵士達の殺気に溢れる戦場に木霊する私の声を耳にし、俄に士気が上がる。

「下がれ、下がれ！ お前達は引け、引いて私と魔術師達に全てまかせろ！」

あとは人の世を脅かし続けた怪物を残すのみ、という戦場に場違いな声だった。

だが、兵士達は不満を口にするどころか、我先にと引き返す。

その雑踏に巻き込まれる者も少なくはないだろう。

ところどころに悲鳴が聞こえていた。

そう、これだけの数で押し攻めていても、誰もが怯えていたのだ。

惨憺たる殺戮場でただ一人、踊り狂う者がいた。

……カタストロフ！

近くにいる者を一瞬にして亡き者に変え、信じられない速度で進撃している。

馬に跨って進撃する軍以上の速度ではないか。

その圧倒的な速度、戦闘技量に戦慄する。

これではまるで死の突風。

飲み込まれれば一瞬にして肉塊へと変えられてしまう。

今、この瞬間。

私はアレに立ち向かうのだという。

明確な死が、闇がすぐ目の前にまで迫っていた。

本当は、戦場に溢れる殺気は彼女だけのものではないのか。

そう思ってしまうほどに、身の毛もよだつ残虐極まりない姿がそこにある。

兵士達が我先にと逃げ出すのも無理はない。

最前にいた兵士達は彼女に立ち向かうことさえできないでいた。

一瞬にして朽ち果てる同胞の死にざまを見て、恐怖の余り悲鳴を上げ、地面に転げ、失禁している者がほとんど。

他は、彼女の姿を目にした瞬間から恐怖の余り気を失う始末。

彼女を討伐するために進撃していたと思いきや、彼らは、彼女の格好の餌でしかなかったのだ。

左腕の鎧に括りつけた盾の具合を確かめ、槍を両手で握り絞める。

馬の背に二本の足で屈むように立つ。

ものの数秒で、彼女と接触するところまでできていた。

馬が、地面を這って逃げる兵士達を飛び越える。

逃げ惑う兵士しかいない地獄の中に、ただ一人、最初の開戦を告げた司令官と思わしき者が来たことに、彼女は僅かに顔を顰めさせた。

本来、司令官が最前線に来るわけがない。

その微かな疑念も一瞬。

魔剣が不気味に蠢動しながら迫っていた。

馬の背を蹴り、天地を逆さまに。

宙返りをしながら、空中から彼女に渾身の突きを浴びせた。

馬は魔剣に切り裂かれ、嘶きを上げる暇さえなく腐り果て、絶命していた。

確かな手ごたえがあった。

難なく着地すると、足下に転がる腐乱死体や夥しい血液、脳漿によつてできた地獄の海が音を立てる。

鼻がねじ曲がりそうな死の臭いが充満している。

そのただ中が、彼女と二度目の出会いの場だった。

私の腰ほどしかない小さな少女が、人間を殺す時の恍惚とした表情を瞬時に切り捨て、私を睨んだ。

紅い瞳と、紅い瞳が交差する。

殺す、殺す。人間の味方をする者も同類。私の前に立ちふさがる者は、皆、殺す。

目を合わせただけで死んでしまいそんな憎悪が脳に直接流れ込んでくる。

冷や汗がどつと噴き出る。

喉は一瞬にして干からびる。

失禁するのも、気を失うのも分かる。

下手をすれば、心臓が止まりそうに濃い憎悪が戦意をたちどころに削いでいた。

これが災厄の使徒とまで謳われる、史上最悪最強の怪物、カタストロフ。

今まで相手してきた人外とは、比べるのがバカバカしいほどの、圧倒的な気配。

掛ける声もなかった。

圧倒的な強者の気配に体温はまるで凍えた湖に身を投げたように、冷え切っていた。

本拠地を出る前に呷ってきた林檎酒による灼熱感も、極寒の地にいるように消え失せる。

体中の水分という水分が一瞬にして蒸発し、喉がカラカラに乾く。乾ききった唇を兜の中で舐め、湿り気を与えようとする。

だが、舌も枯れ果てたように、唇に湿り気を与えることができなかった。

目は、いつ動き出すか分からない彼女を捉え、裂けんばかりに見開いたまま。

死への恐怖が、本能的な闘争本能を呼び覚まし、なんとか立ったまま対峙できるといったところだ。

まだ打ち合っすらいらないのに、負けると確信してしまっている。勝てるわけがない、と。

不意に、小枝ほどに小さく、脆そうな彼女の体が視界から消失した。

ほんの一瞬の動揺の間に、彼女は地面に這い蹲るほどに身を縮こ

ませて急接近したのだ。

両手両足で、まるで獣のように間合いを詰める姿に、情けなくも悲鳴の音が漏れる。

しかし、からからに乾き切った喉のために、掠れた呼気が聞こえるのみ。

反射的に彼女めがけ振るう槍は空振りに終わる。

両手両足で跳ね上がるように、爆発的な全身の筋運動によって彼女の体が弾丸のように弾けた。

小さな体には、大砲をも超える破壊力が秘められているだろう。

そこから繰り出されるありとあらゆる肉体酷使法と技術が織り成す必殺の切り上げが炸裂した。

死んだ。

あまりの恐怖に失禁しそうになる。

彼女の前では、どんなに鍛え抜き、どんな死線をくぐり抜けた私でも、赤子同然だった。

だが、いつまで経っても恐怖に埋め尽くされた思考の海が消え果てることはなかった。

生きていたのだ。

あの禍々しい、邪悪な剣に一刀両断され、ずぶずぶと肉体が腐れ、元が誰なのか分からない亡き骸へと変わり果てたつもりが。

邪悪な剣は、鎧に接触した先から、まるで元から存在していなかったように消失していた。

鎧を通り過ぎたところで、元通りの、両身両刃の剣の形へと戻っている。

彼女の顔は初めて驚愕に歪む。

凍えきっていた体が、たちどころに熱く、燃え盛る。
亡き父の肉体どころか精神までが染み込んだ武具の前に、かの邪
悪な剣は蒸散したのだ。

気付けば、彼女の脇腹が不気味な暗黒の蠢動に歪んでいる。

それは、槍が穿った穴。

槍を無我夢中で突き出し、それは、彼女の脇腹を抉っていたのだ。

これならば行ける、という希望と、信じられないものを見る恐怖
が入り混じる。

彼女の脇腹は、すでに元通りの形となっていたのだ。

一瞬。瞬きの間にあれだけの傷が跡形もなく再生。

いくら超人的な回復力を秘める人外であろうと、深い切り傷の修
復に2日。

骨が折れば1、2週間。

腕がもげれば1月。

彼女のように肋骨と臓器をも粉碎した状態ならば完全修復に3カ
月がかかるだろう。

だが、彼女の肉体は一瞬にして元通り。

凍えるように冷たい、冷や汗が絶えず体温を奪う。

このままミイラになってしまいうさだ。

どんな致命的な一撃を与えたとして、彼女の肉体は瞬く間に再生を
終え、襲いかかるだろう。

にたりと、彼女が長い牙をむき出しに陰険な笑みを浮かべた。

恐怖が脳髓を麻痺させる。

彼女は気付いたのだ。そして、瞬時に判断を下す。

私に対して、自分の武器は通用しない、自分の身を守る暗黒も、

無意味でしかない。

血の海の滴を撒き散らし、氷の上を滑るかのようになり、凄まじい速度で迫る。

小さな体と四肢が、獰猛な獣に見えてならなかった。

その肉体は、絶対的な破壊力を凝固したものなのだ。

細い四肢が舞う。

一瞬遅れて防御の姿勢を取った時には、すでに遅かった。

私の体に飛び付き、蛇のように体をぐるりと絡ませたと思いきや、

その瞬間に私は血の海に転がっていた。

華奢な脚で首を完全に捕まえ、渾身の力で後方へ仰け反り無理矢理に重心を崩す。

力の流れをそのままに、頭から地面に投げ崩したのだ。

その動作の中、人外の圧倒的な怪力を一度たりとも感じてはいない。

彼女は、ただの技術のみで私を軽々とねじ伏せてみせたのだ。

プロローグ6（後書き）

はい。プロ6です。

いやー、戦闘ってむずいですよ。銭湯ならR・18で書けたんだけどね（殴

戦闘は極力書きたくないってのが本音。

日常いいよ日常！書けないけど！

ただまあ、初めて書き始めた時に比べればさすがにマシかな、とは思ったりします。

小説はむずかしいですなー！。

プロローグ7（前書き）

あらすじ

- ・ 終わりの予感ッ！？
- ・ 何か具体的な性能出てきた
- ・ ドキドキ

プロローグ7

血の海に沈んだ私の胴体に 鎧に手を添えて彼女は何かを發した。

鋭い衝撃が鎧を貫通し、臓器そのものを殴られたような痛みが奔る。

ごぼと音を立て、兜の中は濃密な鉄臭さに包まれた。

内臓が……やられたっ!?

そんな攻撃手法など、見たことも聞いたこともない！
だが、現に、その攻撃はこの身を襲っている。
それも、次々と。

たしかに、この鎧は彼女の持つ武器を無効化してみせた。
それだけで勝てるなど、思い上がりも甚だしいのだった。

彼女の真の武器とは、何もその剣だけではない。

その肉体こそが、殺戮兵器なのだ。

人だけが対象というわけでもないだろう。

物体の脆い部分さえも瞬時に見分け、突き崩すことさえも可能かもしれない。

なぜならば、彼女の前では、城壁さえも砂山に過ぎないのだから。

山地に囲まれた天然城塞を一夜にして壊滅させたという戦慄の一報も、耳に新しい。

彼女は、殊、破壊に特化していた。

完膚無き破壊に。

その圧倒的な強さから、破壊神と崇め讃える人間さえも生まれてしまっただけである。

そう、彼女は生き神だった。

残念ながら神聖な神ではなく、邪悪なものだったが、生きた者が神と位置づけられる異例なもの。

まさに、人智を超えた存在なのだ。

人の枠を超えた人外をも超える、超人的な存在。

それを前にしては、何者もが怯え、竦み上がるしかなかった。

そうやって、何千、何万もの人々が暮らす都が数えきれないほど破壊し尽くされた。

赦されることはない。

彼女が悲劇に塗れているからといって、それを無かったことにするような私でもなかった。

煮え滾るように体が熱い。

痛みで体が熱いのか、怒りで体が熱いのか。よく分からないでいた。

死の淵に片手でぶら下がっているような状態から、気合とともに体を起こし、情け容赦ない打撃を浴びせる小さな体を掴んだ。

掴んだ先から簡単に粉碎してしまいそんな華奢な肩は、謎の暗黒に覆われていた。

が。

籠手はその肩に触れた瞬間、ただの布　彼女が体を覆っていた真つ白な衣服が剥き出しとなった。

暗黒が、聖なる波動から逃げ去ったのだ。

不気味に蠢動する日光さえ呑み込んでしまうソレは、この手から逃れるように彼女の体の端へと逃げてしまっていた。

何かを握り潰すような音が耳を突く。

私の上で絶えず打撃を振るう少女の肩が、私の手で握り潰されたのだ。

まるで、自分の娘を殺しているような幻影がそこにあった。
その幻影を振り払う。

娘の肩が信じられない握力で潰され、肩から腕がもげる惨状を
歯を食いしばって、幻影を振り払う。

そこには、驚愕のまま固まっているカラストロフの姿。

肩から先は、さきほどのような瞬間的な再生をみせることはな
かった。

あの瞬間的な再生の秘密は、体の隅に逃げてしまっている暗黒に
あるのだろうか？

それが無い体はただの人外となんら変わりなく、再生する様子は
ない。

やろうと思えば、このまま体を粉碎してしまえただろう。

それだけで、人外の統治者とも呼べる彼女が倒れ、永きに渡る戦
いは終わる。

そして、私を始めとする一族は英雄として讃え続けられる。

だが、そんなことはどうでもいい。

私は彼女を殺したいのではない。

彼女の心が救われる日を待ち望むのだ。

いつしか、人を殺した時にしか笑みを零さない仮面の顔に、本当
の、見た目相応の笑顔が溢れることを。

いつの間にか、私は彼女を押し倒していた。

形勢逆転。

槍の穂先の根元を掴み、彼女の胸めがけ振り下ろす。

彼女の体組織は、槍に触れた瞬間から死滅していき、血の海に槍
が突き立った。

脊髄を首元で断ち切る。

彼女は鬼の形相で私を睨み、口々に罵声を浴びせてくる。

しかし、まるで耳に入らない。

彼女から受けた打撃によって私は死線を彷徨っていたのだ。

必死の足掻きで彼女を無力化したのは、奇跡と言ってもいい。

脳の指令が首元で途絶えるため、彼女の四肢はぴくりとも動かない。

私の役目は、これで果たせた。

その時だった。

大地が大地震のように揺れる。

大地だけでない。

大気も、大きく震えている。

見れば周囲の空間から遠近感が消失している。

ここだけが隔離されているような錯覚。

空間異常地の境目には、失われた大昔の文字が刻まれた石が乱立していた。

それを囲むように、真黒な布に身を包んだ魔術師達が、脳に直接響くような不気味な呪文を唱えている。

死と隣合わせの戦闘で気付かなかつたが、ようやく『起源と終焉』へ繋げる儀式が始まったのだ。

地震も、空間の異変もその前兆に過ぎない。

「人間どもが、虫けらが、いったい何をするつもりだ！」

あらん限りの怒り、憎悪を滲ませてカタストロフが有無を言わさないような声色で吠えたてる。

残念ながら、死を漂わせる気配の割に、その声は見た目相応に愛らしいものだった。

猛獣が家畜化された愛らしい獣の鳴き声を上げる、そんな違和感めいたものだ。

そこで、ようやく気付いたことがあった。

彼女はほとんど声を出さないことに。

どんな声なのか、そんな話も一切耳にしたことがない。

もしかしたら、自分がこんな悪魔のように扱われているのに、声はこんな見た目相応の少女の声だということを嫌悪していたのかも
しれない。

彼女の人間味を見たところで、緊張の糸も完全に切れた。

意識を失う直前、最後に見たのは

ありとあらゆる人間、生物、建造物、歴史、見たこともないような鉄の箱や、人々が闊歩する世界。

それは、あの青年が口にしていた、

「あらゆる歴史。未来と過去。様々な筋道を通った世界が一ヶ所に内包された空間」

と呼ばれる謎めいた、俄に信じられない空間だった。

……まさか、本当にこのような場所が存在するとは

その思考を最後に、意識は途絶えた。

プロローグ7（後書き）

） r y 7 です。

ようやく堅苦しいプロローグ終わりです！もうしわけありません！

次のはけっこう軽くなるはずなんですけど……

気付くとまた重くなってそうで怖いです……

戦闘抜けた喜びで書いたので内容は充実して、るといいなあ（・）（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6290t/>

幻想の世界に落ちた呪い

2011年5月31日00時40分発行